

ワーカーのモチベーションを 高めてこそオフィスデザイン

ヴァン・ダー アーキテクトジャパン株式会社 代表取締役/建築家
ヴァン・ダー・リンデン・マーティン



Photo by Ines

*本稿は、英文を和訳したものです。

創造的デザインは 綿密な調査が育む

2004年2月、ヴァン・ダー アーキテクトは、アーンスト・アンド・ヤング社（以下E&Y社）より「エネルギーで洗練された人材の獲得・維持ができるよう、そのような人材が好む奇抜でありながらも機能的な」オフィスのデザインを依頼されました。ヴァン・ダー アーキテクトでは、「デザインは、調査結果の分析から生まれる課題に対する創造的な解決策である」というアプローチを取っており、社員のワークモード等の綿密な調査をデザインの基礎とします。このようにしてデザインされたE&Y社のオフィスは、そこで働く人々特有のニーズに適ったユニークな空間となりました。

E&Y社では会議用スペースの不足が明らかでした。そこで、新オフィスには会議用スペースを従来よりも75%増加することにしました。当初E&Y社は、来客用会議室を窓際に配置したいと考えていましたが、ビルのレイアウトや受付の位置関係から、窓際に会議

室を配置するとオフィスが分断されてしまいます。調査からオフィスの柔軟性も重要な課題の一つであると分かったため、オフィスが二分されて柔軟性を損なうことのないよう、会議室を窓際に配置することは中止になりました。

E&Y社では、様々なチームが、あるプロジェクトに数週間から数か月の期間にわたって参加し、その後、それぞれがまた別々のプロジェクトに参加するという働き方をしていました。そこで、オフィスを縦断するように電源とネットワークコネクションを並べた二本の「背骨」に沿ってデスクを配置し、「背骨」に沿ったデスクの移動を容易にできるようにしました。その結果、プロジェクトチームごとのデスク編成や解散が簡単に行えるようになりました。

そして、動線が「背骨」を分断しないよう、中央の受付とビルの右端に位置する会議室を結ぶ25mのトンネル型廊下「ブリッジ」がデザインされました。「ブリッジ」は、片方の壁にカラーガラス、もう片方に湾曲したアルミパネルを使用し、格子状スチールパネル

の上に強化ガラスパネルを施した床は、床下からLEDライトで照らされ、E&Y社が望む最先端のイメージを作り出しています。

また、オフィスエリアよりも僅かに低い楕円形の天井の下に作られたブレイクエリアが、ハイペースなビジネス環境の中の休息所としてオフィスの中心に作られました。そこにはラウンジチェア、プランター、メールボックスがランダムに置かれ、整然と並べられた周りのデスクと対比して、このエリアのカジュアルさを際立っています。

機能以外に追求すべき大切なもの

このように、ワーク環境のデザインに投資することは意味があることなのでしょう。

アメリカ人建築家ルイス・サリバンが残した有名な言葉「Form Follows function（形は機能に従う）」のとおり、オフィスは可能な限り合理的・機能的にデザインされています。しかしながら、機能を追求すると同時に、そこで働く人々が能力を発揮できるよう彼らを動機付ける環境としてオフィスをデ

ザインすることも重要なことなのです。

1954年に出版された『動機と人格』という本の中で、アブラハム・マズローは、下位の欲求が満たされると上位の欲求を志すという、人間の欲求の段階について述べました。一番下の段階は、酸素・睡眠・水といった生理的欲求のような基本的欲求で、この欲求が満たされないと、人は病気になったり、痛みや不快を感じたりします。そして、基本的欲求が満たされると、今度は手に入れたものを守りたいという安全・安心の欲求を感じます。社会的欲求は、人が組織やバーといった場所に集まり、寂しさや疎外感から逃れたいという欲求です。自己認識または自我の欲求は、承認・名声・尊敬といった自尊への欲求です。自己実現の欲求と呼ばれる最後の欲求は、自分がなりたいものになりたいというような、自分の最大の可能性を発揮したいという欲求です。

これらの欲求とその階層的な相関関係は、ワーク環境においても同様に重要です。たとえば机・椅子・エアコンといったオフィスの基本的な欲求が当た

り前のように与えられていたとしても、例えば、新しい机を与えられればワーカーはその違いに気付き、心理的な影響を受けます。オフィスにおける安全・安心の欲求は、視覚的・聴覚的プライバシーがあること、自分専用の机や空間を持つことができること等といえます。さらに、オフィスで過ごす時間を考えると、社会的欲求も重要であると言えます。

ステータス・差別化のような自己認識の欲求は、企業における階層構造がますます平坦化してきているにもかかわらず、社員の動機付けにおいて重要な役割をはたしています。最後に、人々は、仕事を通して自己実現を目指します。このように、オフィスにおける欲求にも階層があり、例えば、騒がしくて集中できない環境で働いている社員は、もっと挑戦的な仕事をしたいと思う前に、目の前の仕事を片付けるためにもっと静かな場所が欲しいと思うものなのです。

オフィスは企業の財産である

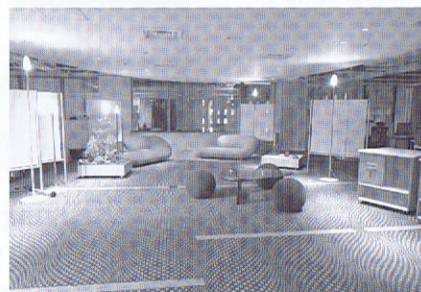
企業の諸経費をみると、ファシ

リティには全経費の約5%しか割り当てられていないのに対して、約80%が給与によって占められていることに気が付きます。オフィスが社員の動機付けに及ぼす影響を考えると、デザインの潜在的な価値は非常に高いといえます。大多数の企業は、適切にデザインされたワーク環境が生み出す可能性について殆ど注意を払ったことがありません。従って、オフィスは認識されていない財産であり、殆どの場合、認識されないまま終わっているのです。従来のオフィスデザインでは、最も基本的な要素のみ考慮されていたように思われます。机・椅子・収納スペースのようなハード面、純粋に機能的な課題は、最も簡単に解決することができました。

しかしながら、機能面と同時に社員の動機付けにおいても機能するワーク環境をデザインすることは、動機付けの要因に対する深い理解が要求される仕事です。しかし、それによって得られる恩恵は大きく、投資に値するものなのです。



背骨に沿って配置されたデスクがプロジェクトチームごとのデスク編成や解散を容易にしている



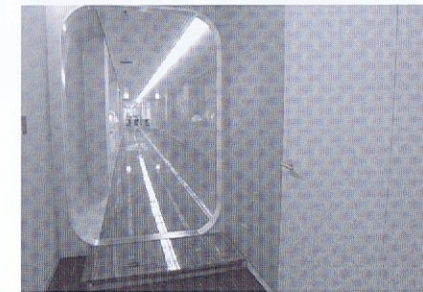
オフィス中心部に作られたブレイクエリア。社員のミーティングポイントでもある



新たに増加された会議室



ブリッジを通り抜けた先のスペース



中央の受付とミーティングスペースを結ぶブリッジ



ブリッジの内部。先進的なイメージを作り出している